

# とぎには、辛口

9

## ◆未来は予測できない

中大の卒業式には毎年の恒例として来賓の名士の短い講演がおこなわれる。指名された来賓の方々にとつてもおそらくは一生に一度の機会とあつてそれぞれに中身の濃い、ひきしまった講演をされるので、私にはこの講演が楽しみと言つたらいいのか、来賓の講演を聞くために卒業式に出ているようなところがある。

### 卒業式の名講演—高橋健二さん

毎年聞いてきた講演の中で一番うまいと思つたのは、ヘッセやケストナーの翻訳で知られる高橋健二さんであつたらうか。



松本道介  
Michisuke Matsumoto

高橋さんは六年前に九十七歳の高齢で亡くなられたが、卒業式に来られた時も九十に近いお年だったような気がする。最前列に並び総代諸君のように高空飛行で悠悠と卒業された方もあれば、超低空飛行で見事に卒業された方もありましょう。といった表現で皆を笑わせながら、ヘッセの人生訓を引用してたくみに話をまとめられたのを今でも覚えてい

### 鈴木敏文さんの話

しかし私自身が生きていく上での指針を与えられた思いで聞いたものとして記憶に残る

のは、イトーヨーカ堂社長（当時）鈴木敏文さんの講演である。鈴木さんが卒業式に来られたのは高橋健二さんより十年程あつたと思うが、鈴木さんは、われわれに未来を予測することはできない、とりわけ世の中の変化を予測することはできない、できるのは起きてしまった変化をいち早く見抜いてこれに対処することであるといった話をされた。

当時の私も、未来の変化が予測出来ないことを痛感していたので、なるほどと、なにか膝を打つ思いで鈴木さんのお話を聞いたのを覚えている。予測できなかった社会の変化として当時私に一番痛切だったのは一九八九年の共産主義世界の崩壊である。発端は八月十一日九日のベルリンの壁崩壊であつた。

私は長い間ドイツの文学や社会を研究対象にしてきたので、第二次大戦後ドイツが東西に別れて存在する事態がいつも気になつてきた。今から二十年前の一九八四年には東西ドイツの国境を越えたこともある。むろん日本人の場合、手続きさえ整えておけば東西の国境は簡単に通過させてくれる。しかしなんの変哲もないなだらかな平地のまんなか鉄条網が張られ、強力な地雷が埋めてあるという

国境、この国境をはさんで顔立ちも言葉も同じドイツ人が別れてくらし、決して会って話すことも出来ない事態はまさに不自然であり異様なことに思われた。

この国境線はヨーロッパ全体を共産主義世界と資本主義世界に分ける境界線であり、その境界線の強固さゆえに、当時は未来永劫という大袈裟ながら少なくとも五十年や百年は続くものと思われていた。あの一九八九年という年も十月頃まで格別な変動の徴候はなかったし、大変動を予言した政治家や学者、評論家は誰一人いなかった筈である。

### 「ベルリンの壁」、バブル崩壊…

それが十一月九日の夜に東ベルリンから西ベルリンへの通行が突然フリーになるとともに僅か二ヶ月のうちにドイツ、ソ連をはじめ東欧圏の共産主義体制は雪崩をうつように崩壊……と言いたところだが、そこにはおよそ壮絶な要素は見当らず、なにか破れた風船のしぼむ時のような消滅があった。さらにこれは二十世紀後半の四十年余世界中の人達が秘かに恐れていた「第三次世界大戦」の静かなる終結でもあった。ルーマニアの独裁者

チャウシェスク以外誰一人死者を出さない、あくまで静かな結末であった。

鈴木さんが卒業式で講演された九六年は、八九年来の大変動のあとまだ間もない時期だったが、また考えてみれば、日本は「バブル崩壊」の直後あるいは真最中でもあり、「未来は予測できない」という鈴木さんのお話は、「バブル崩壊」をこそ念頭において聞くべきだったのかもしれない。

私は経済にはおよそ疎い人間であり、土地売買の経験さえ一度もなく、「バブル」にも「崩壊」にも無縁に生きてきた人間だが、日本の「バブル崩壊」には一九二九年のアメリカ大恐慌のような大暴落は起きなかった筈である。したがって「バブル崩壊」初期の地価の値下がり、「崩壊」の始まりを見てとった人にはそれほど損はなかったにちがいない。損をしたのは、自分の背負ったわずかの損を取り返すべく未来の地価上昇に甘い期待を抱いた人達であり、彼らはまさに雪だるま式に負債をふやしていったのだろう。人間に出来るのは、生じた変化に早く気づき、対策を講じることだけだという、鈴木さんの教えはまさに「バブル崩壊」に一番向いている。

そう思ったものの、しばらくするうちに、鈴木さんの言葉は必ずしも「バブル崩壊」を念頭におかれたものではないような気がしてきた。鈴木さんが業界首位の座に導かれたイトーヨーカ堂はどう見ても土地の売買などに直接のかかわりはなさそうな会社である。したがって「未来は予測出来ない」を格別に「バブル崩壊」に結びつけて考える必要はないのだろう。

とは言え鈴木さんの教えが私にとって衝撃的であったという事実にいささかも変りはない。私は一介の教師であり若い頃から一貫して学問の世界に身を置いてきた。そして若い頃は学問をきわめれば未来の展望も多少は開けてくるかもしれないといった甘い期待も抱いていた。しかしいかに研究に励めども展望などいささかも開けてこないまま馬齢のみをかさね、次第に学問自体に対する懷疑も抱きはじめてところへ、経営の現場、ひいては実社会の生存競争の第一線に居られる鈴木さんからズバリ「未来は予測できない」と言われてまさに目から鱗の落ちる思いを味わったのであった。

(文学部教授)